

# 中学生の進路意識に関するモラルの学年比較と関連要因

粕谷 貴志\*

市来 百合子\*\*

奈良教育大学大学院教職開発講座\*

奈良教育大学教育連携講座\*\*

## A Comparative Study of Junior High School Students' Morale toward Career Awareness through their Academic Years.

Takashi Kasuya\*

Yuriko Ichiki\*\*

School of Professional Development in Education, Nara University of Education\*  
Educational Cooperation, Nara University of Education\*\*

<あらまし> 本研究では、中学生の進路意識の学年変化と関連要因の特徴を検討することが目的であった。中学生 1,735 名を対象に質問紙調査により進路意識に関するモラルを測定した。学年比較の結果、進路意識は、学年が上がるとともに高くなる傾向が明らかになった。スクール・モラル各要因との検討をおこなった結果、学年によって、関連する要因に変化が見られた。また、性別によって関連する要因に特徴が見られることが明らかになった。中学生の進路意識を高める指導援助においては、各学年、性別の特徴を踏まえた心理教育的援助が必要であることが示唆された。

<キーワード> 中学生 進路意識 スクール・モラル キャリア教育 学校適応

### 1. 問題と目的

中学生の時期は、思春期における自己探求が始まり、将来に向けて進路に直面していく時期である。Super, D. E. (1957) は、生涯のキャリア発達を5つのステージに分けて捉えている。①成長段階(0歳~14歳)、②探索段階(15歳~24歳)、③確立段階(25歳~44歳)、④維持段階(45歳~64歳)、⑤衰退段階(65歳~)。このキャリア発達のステージから見ると、中学生は、①成長段階から②探索段階への移行の年齢にあたる。自己に気づき、自他の比較、同一視の過程を経て自己概念が形成される成長の段階から、自分の興味や能力、適性、経験を踏まえて進路を考え始める探索の段階に進んでいく時期であると捉えられる。

進路意識のスクール・モラルは、友人関係や学習意欲などとともに学校適応に影響する要因の一つであることが指摘されている(河村, 1999)。スクール・モラル(school morale)とは、「集団生活ないし諸活動に対する帰属感、満足度、依存度な

どを要因とする児童・生徒の個人的、主観的な心理状態」(松山・倉智, 1969)である。将来の「生き方」の問題に直面する中学生において、何らかの原因で進路探索や進路選択に関する進路意識に、ポジティブなモラルをもてない状態であることは、生徒にとって困難な状況であると考えられる。

五十嵐(2011)は、中学生の進路決定スキルの低さが、中学校段階での「遊び・非行に関連する不登校傾向」の上昇と関連していることを指摘した。探索段階に移行する時期である中学生にとって、進路に関する問題は、学校適応に影響を与える重要な問題であるといえよう。

古川・松川・浅川・上地(2001)は、中学校における進路意識は、自己効力や対人関係に関する適応感とともに、高校進学後の適応に関連することを示している。中学生の段階で、進路意識を形成しておくことは、その後の学校適応を考える上でも重視すべき課題であると考えられる。

中学生の進路意識のモラルは、ソーシャル・ス

キルの自己認知との関連があることが指摘されている(河村, 1999)。また、進路意識のモラールは、愛着タイプの安定型において高く、不安定型において低いことが指摘されている(粕谷・河村, 2005)。さらに、南・浅川・岸野(2011)は、時間的展望における未知なるものへの不安と対をなす自分に対する自信である「希望」の高さと進路意識は関連があることを明らかにしている。中学生の進路意識は、生徒の心理面や社会面の発達との関連も視野に入れて捉えるべき問題であると考えられる。

進路意識の支援について、石津(2006)は、中学生の進路意識のモラールを高める要因を検討し、問題を整理したり方略を支援したりするだけでなく、ソーシャル・サポートにつながる援助が有効であることを示した。これらを踏まえると、中学生の進路意識を高める支援においては、単に意識を高めることにとどまらず、「社会的自立に向けて自らの進路を主体的に形成していく生き方支援」(文部科学省, 2010)が必要とされていると考えられる。

本研究では、中学生の進路意識について理解の視点を得るために、中学生の進路意識のモラールの学年比較をおこないその特徴を明らかにする。その上で、進路意識に影響を与えると考えられる学習意欲、ソーシャル・サポート資源としての友人関係、学級との関係、教師との関係に関するモラールとの関連を検討し、中学生の進路意識に対する心理教育的援助の視点を得ることを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象

A県、B県内の公立中学校5校の1年生596名(男子326名、女子270名)、2年生555名(男子290名、女子265名)、3年生584名(男子291名、女子293名)の合計1735名を対象とした。

### 2.2. 調査時期

調査時期は、入学(1年生)或いは学級開き(2、3年生)から半年以上経過しており、進路意識、学習適応、集団適応が分化していると考えられる3学期の1月から2月であった。

### 2.3. 調査内容

河村(1999)が作成したスクール・モラール尺度を用いた。この尺度は、進路意識4項目、学習意欲4項目、友人との関係4項目、教師との関係4項目、学級との関係4項目の5つの下位尺度、全20項目で構成される。5件法(5:とてもあてはまる、4:少しあてはまる、3:どちらとも言えない、2:あまりあてはまらない、1:全くあてはまらない)で回答を求めた。

### 2.4. 手続き

学級担任に依頼し、集団形式で実施した。実施にあたっては、学校の成績に一切関係がないこと、個人のプライバシーは保護されることを説明した。

## 3. 結果

### 3.1. 分析対象

有効回答は、1680名分であった(有効回答率96.8%)。無効回答は、無回答の項目があるものと、全項目に同じ回答を選択するなど著しく偏った回答が見られたものであった。

### 3.2. 尺度の因子分析結果と各下位尺度の記述統計量

スクール・モラール尺度について、因子分析をおこない、原尺度と同様の因子構造であることを確認した(Table 1)。各下位尺度の信頼性係数(Cronbach  $\alpha$ )は、 $\alpha = .753 \sim \alpha = .856$ であり、原尺度と同じ項目構成で使用可能であることを確認した。

各変数について、先行研究をもとに、下位尺度ごとに項目得点の合計を算出し、下位尺度得点とした。それらの記述統計量をTable 2に示した。

### 3.2. 進路意識の学年変化の検討

進路意識の学年変化を検討するために、学年×性別の2要因の分散分析をおこなった。交互作用が有意傾向( $F(2,1674) = 2.71, p < .10$ )であったため、男女別および、学年別に単純主効果を検討した。その結果、男子においては、1年生より3年生の進路意識が有意( $F(2,784) = 4.72, p < .01$ )に高く、女子においては、1年生、2年生より3年生の進路意識が有意( $F(2,799) = 19.37, p < .01$ )に高い結果であった。また、全ての学年で男子より女子の進路意識が有意(1学年: $F(1,554) = 5.87, p < .05$ 、2学年: $F(1,543) = 7.70, p < .01$ 、3学年: $F(1,577) = 32.66, p < .01$ )に高い結果であった(Table 3)。

### 3.3. 進路意識と関連要因との検討

進路意識と関連する要因を検討するために、進路意識得点を目的変数に、学習意欲得点、友人との関係得点、学級との関係得点、教師との関係得点を説明変数にして重回帰分析をおこなった。説明変数間の相関は、 $r = .296 \sim r = .557$ であったが(Table 1)、VIF(Variance Inflation Factor)は、1.10~1.45の範囲であり、多重共線性の指標である $VIF > 10$ (小田, 2007)を下回るものであった。そのため、学習意欲、友人との関係、学級との関係、教師との関係の4因子全てを説明変数として分析をおこなっ

Table 1 スクール・モラル尺度の因子分析結果（最尤法プロマックス回転）

	進路意識	学習意欲	友人との関係	学級との関係	教師との関係
(α=.822)					
なりたい職業や興味を持っている職業がある	.920	-.071	-.046	-.010	-.005
自分の将来に夢や希望をもっている	.879	.025	-.028	.052	-.030
自分のすすみたい職業の分野については自分から調べている	.859	.044	-.061	-.026	-.011
進路について仲のよい友人などと話し合うことがある	.484	-.026	.283	.002	.101
(α=.753)					
授業の内容は理解できる	-.105	.865	-.080	-.020	.016
勉強には自分から進んで取り組んでいる	-.017	.788	.006	.097	-.035
自分なりの学習の仕方がある	.058	.762	.063	-.098	.002
得意な教科や好きな教科がある	.080	.579	.065	-.007	.047
(α=.776)					
気軽に話せる友人がいる	-.034	-.067	.900	-.072	.007
おしゃべりや活動にさそってくれる友人がいる	-.077	.001	.856	.043	-.050
友人関係をよくしたりする方法を知っている	.007	.081	.703	-.022	-.008
友人との付き合いは自分の成長にとって大切だと思う	.053	.035	.656	.052	-.012
(α=.856)					
クラスでほっとしたり、明るい気分になったりする	-.038	-.029	.050	.899	-.009
自分のクラスは仲のよいクラスだと思う	-.029	-.057	-.093	.894	.022
クラスの行事に参加したり、活動したりするのは楽しい	.048	-.023	.024	.868	-.041
自分もクラスの活動に貢献していると思う	.074	.179	.042	.610	.023
(α=.804)					
気軽によく話ができる先生がいる	.024	-.018	.059	-.109	.880
悩みを相談できる先生がいる	.048	.035	-.097	-.080	.855
担任の先生とはうまくいっていると思う	-.065	.051	-.091	.117	.772
先生の前でも自分らしくふるまっている	-.047	-.076	.148	.192	.608
(因子間相関)					
進路意識		.347	.320	.296	.324
学習意欲			.327	.398	.350
友人との関係				.557	.388
学級との関係					.487

Table 2 スクール・モラル各下位尺度の記述統計量

	M (SD)
進路意識	14.13 (4.11)
学習意欲	14.15 (3.14)
友人との関係	16.40 (2.86)
学級との問題	13.68 (3.86)
教師との関係	12.56 (3.75)

た。それぞれの説明変数から目的変数への標準偏回帰係数を Table 4 に示した。

1年生男子においては、予測変数として「学習意欲」「友人との関係」「教師との関係」が選択され、「学習意欲」( $\beta=.208, p<.01$ )の係数が最も大きかった。1年生女子においては、予測変数として

「学習意欲」「学級との関係」が選択され、「学習意欲」( $\beta=.334, p<.01$ )に次いで「学級との関係」( $\beta=.240, p<.01$ )の係数が大きかった。

2年生男子においては、予測変数として「学習意欲」「友人との関係」「学級との関係」「教師との関係」の全てが選択され、「教師との関係」( $\beta=.196, p<.01$ )に次いで「学習意欲」( $\beta=.166, p<.01$ )の係数が大きかった。2年生女子においては、予測変数として「学習意欲」「友人との関係」「教師との関係」が選択され、「学習意欲」( $\beta=.271, p<.01$ )に次いで「教師との関係」( $\beta=.155, p<.05$ )の係数が大きかった。

3年生男子においては、予測変数として「学習意欲」「友人との関係」「教師との関係」が選択され、「友人との関係」( $\beta=.264, p<.01$ )に次いで「学習

Table 3 進路意識得点の (学年) × (性) の分散分析結果

	1年生			2年生			3年生			全体		主効果		交互作用
	男子 n=304	女子 n=252	合計 n=556	男子 n=286	女子 n=259	合計 n=545	男子 n=288	女子 n=291	合計 n=579	男子 n=787	女子 n=802	性別 F値	学年 F値	F値
進路意識	13.12 (4.08)	13.96 (4.04)	13.50 (4.08)	13.35 (3.93)	14.32 (4.21)	13.81 (4.09)	14.09 (4.31)	15.95 (3.46)	15.03 (4.01)	13.51 (4.13)	14.80 (3.99)	38.72 **	21.79 **	2.71 †
	男子<女子*			男子<女子**			男子<女子**			男子：1年<3年 女子：1年・2年<3年				

( ) 内は標準偏差 † : p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01

Table 4 学年、性別毎の進路意識に対するスクールモラル4因子の重回帰分析結果

	1年生		2年生		3年生	
	男子 n=304	女子 n=252	男子 n=286	女子 n=259	男子 n=288	女子 n=291
	標準偏回帰係数		標準偏回帰係数		標準偏回帰係数	
学習意欲得点	.208**	.334**	.166**	.271**	.206**	.205**
友人との関係得点	.144*	.002n.s.	.127 †	.123 †	.264**	.194**
学級との関係関係	.025n.s.	.240**	.152*	.022n.s.	.086n.s.	-.060n.s.
教師との関係得点	.135 †	.041n.s.	.196**	.155*	.140*	.226**
重相関係数 (R)	.399	.495	.487	.399	.546	.438
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.159	.245	.237	.160	.298	.191

† : p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01

意欲」(β=.206, p<.01)の係数が大きい結果であった。3年生女子においては、予測変数として「学習意欲」「友人との関係」「教師との関係」が選択され、「教師との関係」(β=.226, p<.01)に次いで「学習意欲」(β=.205, p<.01)「友人との関係」(β=.194, p<.01)の係数が大きかった。

以上より、「学習意欲」は、全学年において男女ともに正の予測変数であることが明らかになった。また、「友人との関係」は、1、2年生に比べて3年生では係数が大きくなり、3年生においては、「学習意欲」と同じ程度の正の予測変数であることが明らかになった。さらに、「教師との関係」は、1年生より2、3年生で係数が大きい傾向が見られ、2年男子、3年女子では最も係数の大きい予測変数であることが明らかになった。

#### 4. 考察

本研究の目的は、中学生の進路意識に関するモラルの学年ごとの特徴を明らかにし、進路意識を高める支援の視点を検討することであった。分析の結果、各学年、男女毎の特徴が明らかになり、進路意識の予測変数となる要因が特定された。以下に得られた結果についての考察をおこなう。

##### 4.1. 進路意識の学年・男女別比較について

進路意識のモラルの学年比較では、男子、女子ともに、学年が上がるにつれて高くなる傾向が見られた。これは、河村(1999)の指摘と一致する結果であった。本研究では、その傾向に男女の差異が見られた。男子は、1年生と2年生間および、2年生と

3年生間に有意な差はみられず、1年生から3年生にかけて徐々に上昇する傾向であったが、女子は1年生と2年生間に有意な差はみられず、1年生と3年生間および、2年生と3年生間に有意な差がみられ、2年生から3年生間に上昇の段差があることを示す結果であった。また、男女比較では、各学年とも女子が高い傾向が見られた。数値の比較では、男子においては、3年生においても、女子の2年生よりも低い数値であり、学年が上がっても、女子ほどに進路意識に関するモラルは高まらないことを示している。さらに、標準偏差の値を見ると、3年生になると値が小さくなる傾向が見られるが、男子は3年生においても女子に比べてバラツキが大きい結果となっている。このようなことを踏まえると、特に男子においては、進路意識の低い生徒を把握しながら、進路意識に関するモラルを高める適切な支援をおこなうことが求められていると考えられる。

##### 4.2. 進路意識と関連要因について

進路意識と「学習意欲」「友人との関係」「学級との関係」「教師との関係」各因子との関連の検討では、「学習意欲」が男女を問わず、どの学年でも進路意識を支える要因であることがわかった。これは、進路についての自己探索のなかで、学習への適応が大きな要因となっていることを示していると考えられる。小栗(2010)は、学業不振であることが生徒の自尊感情を損なうことから、学校での学習支援の必要性を指摘している。学習への適応に困難を抱えることが自尊感情の低下を招き、それが進路の可能性を考える上でマイナスに影響し進路意識の低下に

つながっていることが推測される。中学校において進学先を選ぶことだけに焦点をあてた指導ではなく、「学びのススメ」といった、広く「生き方」と結びつけた学習を支援する取組が始まっている（河村・粕谷、2006）。生徒の進路意識を支援するためには、学習適応の状態についても把握し、学習を支援することが必要であると考えられる。

「友人との関係」は、3年生では「学習意欲」と同程度に進路意識を支える要因である可能性が示された。淵上（2005）は、学級が集団であることの意義として、①学習の効率性、②社会的学習の場と同時に、③社会性の獲得と自—他の比較による自己確立を挙げている。自己確立に向かう中学生にとって、同年代の友人との関わりなかでアイデンティティの課題にむけた心理社会的発達（Erikson、1950）が促進されることが、進路意識のモラルを支えていると考えられる。

「教師との関係」は学年が上がるとともに進路意識を支える要因となる傾向が示された。石隈（1999）は、生徒の援助資源として、直接生徒に関わる教師の重要性を指摘している。個に応じて、必要なタイミングで適切な教師の援助が得られることは、生徒の進路意識を支える大きな要因であると考えられる。しかしながら、愛着の課題を抱える生徒は教師との関係のモラルが低い傾向にあることが指摘されており（粕谷・河村、2005）、積極的に相談に来る生徒だけでなく、一人で黙々と頑張っているように見える生徒にも、個に応じた支援が必要であろう。

本研究で得られた、友人関係、教師との関係と進路意識に関するモラルとの関連を考えると、中学校において、学習方略への支援や進路に関する情報を提供するだけでなく、友人関係や教師との関係という、人とのかかわりの中で自己形成をしていく環境を通じた支援が求められていると考えられる。

## 5. 今後の課題

本研究は、2県5校の中学生を対象にした研究であったため、中学生一般の傾向を捉えたとはいえない。今後、調査対象を広げながら、その特徴を明らかにしていく必要がある。また、本研究では、一時点での学年比較をおこなった。中学校において、進路意識がどのように変化するかについては、縦断的研究によって、学年変化を見る必要がある。実際に進路意識に向上が見られた生徒とそうではない生徒について、関連要因の分析することで、より確かな

支援の視点が得られると考えられる。今後の課題としたい。

## 引用文献

- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society* (「幼児期と社会 1, 2」仁科弥生 (訳) みすず書房)
- 古川雅文・松川隆夫・浅川潔司・上地安昭 (2001). 中学生の高校進学に伴う学校適応に関する研究—中学校での進路意識、学校適応と高等学校での学校適応の関連— 進路指導研究, 20, 2, 1-10.
- 淵上克義 (2005). 学級組織の心理学 日本文化科学社
- 五十嵐哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連, 教育心理学研究, 59, 64-76.
- 石津憲一郎 (2006). 中学生のスクール・モラルを支える要因の検討, 学校心理学研究, 6, 3-17.
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房
- 粕谷貴志・河村茂雄 (2005). 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連, カウンセリング研究, 38, 206-215.
- 河村茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (2) —スクール・モラル尺度 (中学生用) の作成— カウンセリング研究, 32, 283-291.
- 河村茂雄・粕谷貴志 (2006). 公立学校の挑戦 中学校 図書文化
- 松山安雄・倉智佐一 (1969). 学級におけるスクール・モラルに関する研究 (1) 大阪教育大学紀要 (第IV部門), 18, 19-36.
- 南雅則・浅川潔司・岸野葵 (2011). 時間的展望と中学生の進路意識および学校適応に関する研究, 学校教育学研究, 23, 9-15.
- 文部科学省 (2010). 生徒指導提要
- 小栗正幸 (2010). 発達障害児の思春期と二次障害予防のシナリオ ぎょうせい
- 小田利勝 (2007). ウルトラ・ビギナーズのための SPSS による統計解析入門 プレアデス出版
- Super, E. D. (1957). *The Psychology of Careers*, Harper & Brothers (「職業生活の心理学」日本職業指導学会 (訳) 誠信書房)